



Title	プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論
Author(s)	中澤, 務
Citation	北海道大學文學部紀要, 42(2), 49-72
Issue Date	1994-01-27
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33623">http://hdl.handle.net/2115/33623</a>
Type	bulletin (article)
File Information	42(2)_PR49-72.pdf



[Instructions for use](#)

プラトンの『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

中澤 務

テアイテトス篇は、「知識 (epistēmē) とは何か」を主題とした対話篇であるが、その第二部 (187b-201c) において、プラトンは「思いなし (doxa)」を問題にしている。第一部においては、知識を感覚と同一視するテアイテトスの第一定義が議論の俎上に乗せられ論駁されてきたが、第一定義の最終的な論駁 (184b4-186e12) によって、問題の焦点は「感覚 (aisthēsis)」から「思いなし」へと移行してくる。すなわち、知識は「ある (on)」の把握のうちに存するのであるが、これは感覚によって達成することはできず、こころが自分自身で考察をおこなない、その結果到達されるものである。ここにおいて知識は、感覚とは異なったところの働きに求められ、テアイテトスはこの働きを「思いなし」として定位する。そして第二部は、この「思いなし」というところの働きを中心に議論が展開していくのである。

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

さて、第二部に入ると、テアイテトスは知識の新たな定義として「真なる思いなし (he alēthes doxa, 187b5)」を提出する(これを「第二定義」と呼ぶことにする)。彼は「思いなし」に「真なる」という限定を付加しているが、それは、「思いなし」には虚偽のものも存在するという理由による。したがって、全ての「思いなし」を知識であるとすることはできず、そのうちの真なるものが知識に違いないと彼は主張するわけである。このように、「真なる思いなし」という定義が提示された以上、当然、議論はこの第二定義の当否を巡ってなされるものと予想されるが、しかしこの予想に反して、実際に第二部の議論の大半が費やされるのは、「偽なる思いなし」は成立不可能であるという虚偽不可能論のアポリアなのであり、「真なる思いなし」が議論の前面に取り出されて論駁されるのは、この「偽なる思いなし」のアポリアに対する解決の試みが失敗に帰した後の簡単な議論によって(201a4-c7)に過ぎないようにみえる。しかし、プラトンが第二定義を無視して、それとは全く異なった別の議論を始めたとは思えない。では、両者の間にはいかなる関わりがあるのか。その理由を明らかにすることがテアイテトス篇第二部の謎を解くための最大の鍵であろう。

さて、第二部の議論は、ソクラテスによるアポリアの提示と、そのアポリアから抜け出すためのいくつかの試みによって構成されている。まず最初に「知っている」「知らない」を使った虚偽不可能論が提示され、議論はアポリアに陥る。次に、このアポリアから抜け出すために、「ある」「あらぬ」を使った新たな解決策が提示されるが、これによっても虚偽不可能論を解決することができないまま、議論は再びアポリアに陥る。ソクラテスはこの解決として「思い違い (aliodoxia)」という概念を導入し、これによってアポリアは解決されたかに見えたが、再び第一のアポリアと同種のアポリアが立ち現れてしまう<sup>(1)</sup>。その後、第一のアポリアを解決するために二つの解決の試みがなされるが、

結局このアポリアを解決できないままに終わってしまうのである。以上の議論の流れをみれば明らかのように、第二部の行き詰まりの主要な原因は、最初に提示されている「知っている」「知っていない」によるアポリアである。実際、私の知る限り全ての注釈家達が、第二部の行き詰まりの原因をこのアポリアの中に求めている。したがってこの問題を解決するためには、我々はまずこの第一のアポリアを詳細に検討しなくてはならないであろう。

第一のアポリアは以下のようにして導入される。まず、「全てについて、また、その各々について、我々に可能なのは、知っているか知らないかのいずれかである (188a2)」という知と不知の二分の前提が同意され (これを(A)とする)、この二分が、「思いなす者は、知っているものどものうちの何かを思いなすか、知らないものどものうちの何かを思いなすかのいずれかである (188a7-8)」というかたちで「思いなし」に適用される (これを(B)とする)。そして、「偽なる思いなし」がこれらの組み合わせとして四通りに分類される。すなわち、(一)「知っているものを、別の知っているものであると思う」、(二)「知らないものを、別の知らないものであると思う」、(三)「知っているものを、別の知らないものであると思う」、(四)「知らないものを、別の知っているものであると思う」という四通りである。そして、ソクラテスはこれらの場合分けのそれぞれが成立不可能であることを主張することによって、虚偽を思いなすことの可能性を潰していくのである。

以上の議論は誰にとっても説得的であるとは決していえない。実際、多くの注釈家達は、このアポリアの中には特定の人間にとって説得的な何らかの特殊な前提が潜んでいると考えている。従って問題の焦点は、この議論が誰にとって説得的であったのか (すなわち、作者プラトンにとって説得的であったのか、あるいは、プラトンみずからはコミットすることなしに、ソクラテスあるいはテアイテトスにとって説得的なものとして提示しているのか)、そしてそれ

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

が説得的であった理由は何なのか、という点に集中する。そして、これが明らかになれば、なぜ第二部においてこのようなアポリアが登場したのかという理由もおのずから明らかになるであろう。

これに対する私の解釈は、このアポリアはテアイテトスにとって説得的なものであったというものである。このアポリアは、テアイテトスの提出する第二定義そのものの中に潜在するアポリアなのである。すなわち、この虚偽不可能論によって提示されているような「思いなし」の定式化そのものが、「真なる思いなし」についてのテアイテトスの理解の仕方を精確に反映したものだと考えられる。そして、そうであるとしたら、このアポリアはテアイテトス自身のアポリアであり、このアポリアがアポリアのままに終わることによってあらわにされるのは、「思いなし」に対するテアイテトスの理解の不十分さであるということになるであろう。

しかし、このアポリアをプラトンに帰属させようとする見解が根強いのも確かである。そこでまず、従来の解釈の検討から始めることにしたい。

二

注釈家達の多くはこのアポリアの原因をプラトン自身に帰している。彼らによれば、第二部においてプラトンは、「知識」に関して彼自身が持っている特殊な理解ゆえに、みずから虚偽不可能論の畏に落ち、そこから抜け出そうと格闘しているのである。<sup>(2)</sup>このような読み方について、我々はまず、代表的な解釈の一つであるマクダウエルの解釈に即して検討することにした。

さて、マクダウエルによれば、プラトンは「思いなし」を、「 $x$ は $y$ （と同一）である」というかたちで、つまり、二つの項の間の同一性を問題にする同一性判断として理解していた。プラトンは、この同一性判断をモデルにして、それについて（一）—（四）が不可能であることから、虚偽の判断は不可能であると結論した。しかし、同一性判断以外の判断を考慮に入れれば、この説明は成立しなくなるとマクダウエルはいう。つまり、プラトンの分析は同一性判断という特殊な判断だけを対象にしたものであるのに、これを判断一般に拡張するのは不当であるというのが、マクダウエルの指摘する問題点の一つである。

だが、マクダウエルによれば、問題はこれだけにとどまらない。彼によれば、プラトンはこれ以外にも暗黙の前提を持っており、それが虚偽不可能論の究極的な原因となっている。すなわち、プラトンは、知っているものを思いなす場合と、知らないものを思いなす場合を問題にするとき、知識について特殊な考え方を前提しているのである。プラトンが（二）において、「知らないもの」は思いなすことすら不可能であると主張するとき、彼は、対象を直接的に「見知って」いること（*acquaintance*）を意味している。マクダウエルによれば、この（二）には、「もしひとが、何かを思いなしているなら、彼はそのものを知っていないてはならない」という原理が含意されており、これが（一）—（三）—（四）をも支配している。ところが、プラトンにとってこの知識は、単に思いなしの対象を特定できればよいような弱いものではなく、対象に対する完全な知識なのである。結局、プラトンは、思いなしの成立に必要とされる知識を、このような「見知り」モデルで考えてしまったために、知識というものを *all-or-nothing matter* として扱うことになってしまったとマクダウエルは説明する。しかも、プラトンのこの扱い方の背後には、「 $x$ を知っていること（*knowledge of x*）」を「 $x$ が何であるかを知っていること（*knowledge of what x is*）」を同一視する傾向が潜ん

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

でいるとマクダウエルは指摘するのである。

さて、以上のマクダウエルの解釈は説得的なものといえるだろうか。我々はまず、同一性判断についてテキストを再検討しよう。確かに、(二)の定式化においてソクラテスは、「ソクラテスはテアイテトスである」という同一性判断を例として挙げている。しかし、このことがプラトンが全ての判断を同一性判断に還元して理解していたことの証拠になるとは思えない。彼はこれをあくまで一つの例として提示しているにすぎないと考えることは十分に可能であろう。

そもそも(一)―(四)のソクラテスの「思いなし」の定式化は、必ずしも同一性判断としてしか理解できないようなものではない。同一性判断の例が登場するのは(二)においてであり、この例が(一)の説明を支配していると必ずしも考える必要はない。(一)の定式化は、「知っているもの(a)を、それであるとは思わずに、別の知っているもの(b)であると思う」というものである。この定式化は、『aはbである』と思う」といった、aを主語、bを述語にしたかたちで理解しなくてはならないものではない。確かに、もしこのように理解するとしたら、a、bという二つの対象についての完全な知識が要求されなくては虚偽の可能性は残ることになる。たとえば、(一)において述べられている二つの「知っているもの」を、「ソクラテス」と「テアイテトス」のように理解し、両者について同一性判断をしているのだと考えるような場合には、そのような知識が要求されるかもしれない。だが、この定式化を、「(実際にはaであるものを)『aである』とは思わずに『bである』と思う」というふうに解釈することも可能である。たとえば、「テアイテトス」について「醜い(a)ではなく『美しい(b)』と誤って判断してしまった場合を考えてみよう。このとき、拒絶されている不可能事というのは、「テアイテトスは醜い」と知っているながら、そ

の知識に背いて「テアイテトスは美しい」と判断してしまうような事態であると理解することができるであろう。

ここで、ソクラテスは「知っている」の対象を何らかの「個物」として措定しているのではないかという反論があるかもしれない。しかし、(A)の提示においてソクラテスがそのような措定を行なっているとは必ずしもいえないように思われる。というのは、ソクラテスがここで強調しているのは、知と不知の二分が「あらゆる事柄 (partia)」に適用可能であるということであり、この partia が全ての「個物」を意味すべき必然性はないからである。むしろ、ここでソクラテスがいたいのは、「知が関わりうる全ての事柄について」ということであり、この事柄のうちには単に「個物」だけではなく命題的な知も含まれうるのだと考えた方が文脈に適合していると考えられる。

ところで、以上のような解釈の可能性は最初のパラドクスに限られるものではない。たとえば「思い違い (alloodoxia)」の議論 (189b10-190e4) におけるソクラテスの定式化は、明らかにこのような読みを許容するよう思われる。「ある」「あらぬ」による分析が失敗した後、ソクラテスは、この「ある」「あらぬ」によるもう一つの解決案として「思い違い」という概念を導入し、これによってアポリアを回避しようとする。これは、我々の思いながりに関わっている対象が「ある」ものであることを容認しながら、その「ある」に「別のもの」という性格を負わせることによって、虚偽の可能性を確保しようとするものであるといえるだろう。すなわち、我々が虚偽を思いなすとき、確かに我々は「ある」ものを思いなしているのであるが、実はそれは、「(本来思いなすべきものとは)別のもの」なのであり、この「別のもの」を捉えているという点において、彼は虚偽を犯しているといえるわけである。ソクラテスは、このアイデアを以下のように説明している。



誰かが、あるものどものうちの何かを、あるものどもの別のものと、思考によって取り換え、(そうであると)主張するときに、我々は(この)何らかの思い違いを偽なる思いなしと呼ぶのである。というのは、このようなとき、彼は常に、「あるもの」を思いなししているのであるが、一方のかわりに他方を思いなししているのである。そして、狙っていたものを逸している以上、虚偽を思いなししていると正当にいうであろう。(189b12-c4)

ここでソクラテスが主張しているアイデアは、以下のように解釈することができる。例えば、「テアイテトスは美しい」という虚偽の判断において、確かに判断者は、「あるものどもの一つ」つまり、「美しい」を思いなししている。すなわち彼は、テアイテトスについて「(美しいもので)ある (einaí)」と思いなししている。しかし彼は、思考によって取り換え、「醜い」のかわりに「美しい」という、反対の「ある」を捉えている。確かに彼は、真実を述べているつもりなのであるが、しかし、「狙っているものを逸して」しまっているのである。

この解釈において注目すべきは、判断者は二つの対象について同一性判断をしているわけではないということである。判断者は確かに「醜い」と「美しい」を取り換えているが、しかし、「醜は美である」という判断をしているのではなく、「テアイテトスは美しい」という判断をしているのである。<sup>(4)</sup>一方の項(「醜い」)は判断者には現れていない。彼は何かについて何らかの真なることを主張しようとしたのだが、「思考によって」、誤ったものを捉えてしまったわけである。<sup>(5)</sup>ここで判断は、二つの項の間の同一性判断ではなく、むしろ、何かについて何らかの主張をすることであり、その主張について取り換えをしたわけである。したがって、「別のものを思いなす」という文脈で虚偽が語られるとき、少なくともこの語り方の中には、同一性判断を含蓄するものはないのである。

もし以上のような解釈が許されるとしたら、我々は、ここでの「知っている」を、マクダウエルのような見知り知として考える必要性から解放されるだろう。反対に、もしここでの知識の対象を非命題的な対象として理解し、プラトンはこのような対象に関する同一性判断としての虚偽の思いなしを否定しているのだと考えるなら、どうしてもマクダウエルのいうような見知り知を考えざるをえない。しかし、ここでそのような特殊な知識概念が登場しているとは思われないのである。

以上のように、ソクラテス自身の説明の中に虚偽の可能性を塞いでしまうような暗黙の前提が含意されているという考え方は、必ずしも十分に説得力のあるものとはいえない。また、ソクラテスの定式化に対する理解も、必ずしも絶対的なものとはいえないように思われる。むしろ、我々は(A)の二分法が説得的になりうる別の見方を模索した方がよいのではないだろうか。

### 三

以上の解釈は、アポリアの原因をプラトン自身に帰していた。しかしむしろ、虚偽不可能論のアポリアそのものが、テアイテトス自身のアポリアなのではないだろうか。すなわち、第二定義を提出したとき、テアイテトスの中に虚偽不可能論を帰結してしまうような考え方が存在していたからこそ、ソクラテスはテアイテトスに対して虚偽不可能論のアポリアを投げかけたのではないか。もしそうであるとしたら、我々は、テアイテトスがソクラテスの提示する虚偽不可能論にすぐさま同意してしまう理由も説明することができる。この議論が彼にとって受け入れやすかったの

「プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

は、彼の中にそれを受け入れさせる素地が存在していたからだと説明しうるからである。

このような視点から第二部を見ることは、すでにファイインによっておこなわれている。そこで、次にこのファイインの解釈を見ておこう。ファイインは、「全てについて、また、その各々について、我々に可能なのは、知っているか知らないかのいずれかである」というソクラテスの言葉は、「ある対象Xについて、ひとはそれについての全てのことを知っているか、あるいはまったく何も知らないかのいずれかである」という意味に理解されなくてはならないと主張する。<sup>(6)</sup>彼女によれば、テアイテトスはこのような考え（強い見知りモデル）を暗黙の前提として持っており、これが虚偽不可能論の原因になっているのである。彼女によれば、この前提は第二定義が成立するための十分条件なのであり、したがってプラトンは議論をアポリアに導くことによって、この前提を却下しようとしているのである。<sup>(7)</sup>

アポリアの原因についての彼女の考え方は、明らかにマクダウエルと軌を一にしている。というのは、彼女も対象について *all-or-nothing matter* を帰結するような知識をアポリアの根底に想定しているからである。確かにテアイテトスがこのような前提を持っていたとしたら、この前提によって虚偽不可能論が生じるのは当然といわなくてはならない。というのは、このとき、判断者が何かについて判断するときには、その対象について全ての事柄が知られている以上、その対象についての判断を誤る可能性は原理上否定されてしまうからである。彼女の革新的な点は、この強い見知りモデルをプラトンではなくテアイテトスに帰属させるところに存している。だが、このような強い見知りモデルをテアイテトスに帰属させるどれほどの必然性があるのだろうか。少なくとも対話の表面を追う限り、このような考えを示唆するような証拠は全く現れていないのであり、したがってテアイテトスがそのような知識観を抱いていることを確信させるような外的な証拠を見いだすことは不可能なのである。

彼女はこの見知りモデルが、第二定義の成立のための十分条件であると主張している。確かに、このような強い前提を措定すれば、その中には第二定義も含み込まれるであろう。しかし、テアイテトスは最初の提示(187b4-7)において、偽なる思いなしの存在を確かに認めているのである。もしテアイテトスがこの強い見知りモデルを抱いているとしたら、そもそも彼がこの可能性を認める筈がない。というのは、これが措定されるだけで、全ての思いなしは真であるという結論は決定的に明白なものになってしまうように思われるからである。確かに、このアポリアが登場する背景には、テアイテトスの側に何らかの問題が存しているという考え方は基本的に正しいと思われる。だが、それがファインの主張するような強い見知りモデルであるということには疑義を呈さざるをえないであろう。

以上のファインの解釈は、アポリアの原因を(A)の背後にある、知識についての特殊な理解に求めていた。しかし、むしろこのアポリアは、「知識」というよりも、「真なる思いなし」についてのテアイテトスの理解に依存していると考えべきであるように思われる。これまで注釈家たちは(A)における「知っている」の意味にとらわれてきた。しかしそのように考えると、テアイテトスの第二定義との繋がりが見えなくなってしまう。だが、もし「真なる思いなし」とはいかなるものであるのかについてのテアイテトスの考え方がそもそも不十分なものであったとしたら、ここからアポリアが生じてしまうことは十分に考えられる。もしそうであるとしたら、プラトンはこの議論において、「真なる思いなし」についてのテアイテトスの理解の不十分さを突いていることになるであろう。

テアイテトスは、以下のような推論に基づいて第二定義を導出している。すなわち、第一定義に対する最終的な論駁(184b4-186e12)の結果、知識は「思いなし」の中に求められるべきであることが明らかになった。しかるに「思いなし」には偽なるものも存在する。したがって、知識とは「真なる思いなし」であるに違いない(187b4-7)。こ

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

の推論において、テアイテトスは「真なる信念」とはそもそもいかなるものであるのかについての反省を全くおこなっていない。この点で、彼の考えには、「思いなし」がいかなるものであればそれは「真なる思いなし」と認めうるのかということに対する反省が欠けているのである。ソクラテスは、このテアイテトスの考え方の提示を受けて、以下のように語る。「思いなしには二つの姿があつて、一つは真なるもののそれであり、他は虚偽なるもののそれであるから、その真なる思いなしの方を知識だと定めるといふわけなのかね。(187c3-5)」ここでの「姿 (idea)」という言葉が意味しているのは、外的な「見え」ということであろう。結局、「思いなし」が「真」という外的な見えをみせたとき、それを「知識」として定め、その内的な構造の差異は一切考慮に入れないというのが、テアイテトスの基本的な立場なのではないかと考えられる (cf. 200e4-6)。

では、テアイテトスは当の「真なる思いなし」そのものをどのようなのだと考えているのだろうか。私は、実はこのことがその後のアポリアの議論で問題になっていることなのだと思いたい。すなわち、このアポリアは実はテアイテトス自身にとつての「真なる思いなし」がいかなるものであるのかを提示しているのではないか。つまり、ここで「偽なる思いなし」が存在しないというアポリアが立ち現われてしまうのは、「真なる思いなし」がテアイテトスの理解するようなものである限りにおいてなのであり、ソクラテスがおこなっているのは、テアイテトスに対する *ad hominem* な議論ではなかつたのだろうか。

このような視点から問題を見ると、興味深いのは、ソクラテスがこのアポリアを提示する際、プロタゴラス説をほめかしているという事実である。<sup>(8)</sup>つまり、「思いなしが真である」という事態についてのテアイテトスの理解は、「完全知」が前提になつたものではなく、実は「思いなし」についてのプロタゴラス的な理解 (cf. 156e7 ff.) に由

来するのではないだろうか。

次の章では、従来の解釈に対する批判を踏まえつつ、第一のアポリアがこのような視点から理解できることを明らかにしたい。

#### 四

第一のアポリアの提示において、まずソクラテスは知と不知の二分という前提(A)を唐突に導入してくる。このソクラテスの前提(A)は、これまで虚偽不可能論発生の根本的な原因と考えられてきたものである。すなわち注釈家たちは、この知と不知の二分の中に「知っている」ということの特異な意味を見てきたのである。しかし、ソクラテスの語り方は、そのような特殊な意味を全く前提していないようにみえる。もちろん、1885bにおけるテアイテトスの応答を見れば明らかのように、彼が(A)をもっともらしいと考えたのはこれが排中律であるがゆえである。だが、このような排中律がもっともらしくなるのは、「見知り」という前提に立ったときのみののだろうか。

この「知っている」「知らない」の対象は、すでに見たように、見知りの対象(個物)のみに限られない。ソクラテスの言い方(188a14)をみればわかるように、ここで「知っている」「知らない」の対象となるのは、知識の対象となりうる全ての事柄を含んでいると考えられる。そこに命題的なものが含まれることは、基本的に排除されないように思われる。したがって、ソクラテスは、想定されうる全ての事柄について、知と不知の二分を適用しようとしていることになる。そして、個物についての知に限定されるという想定をしなければ、「知っている」「知らない」に

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

対するある理解のもとでは、この二分法はありそうなものになるように思われる。

では、それはいかなるものなのだろうか。判断者の中にはすでに何らかのかたちで知識が存在しており彼はそれをもとにして判断を下すという考え方は、判断の成立の定式化として常識的なものであろう。(A)において記述されているのは、このような判断の基礎になるような、あらかじめ判断者の中に存在している何らかの知であると理解できる。確かにこの意味においてであれば、判断者はさまざまなものや事柄をあらかじめ「知っている」ともいえるであろう。彼はこれらのさまざまな知識をもとにして判断を下す(B)。判断者の中に何らかのかたちで形成された知が存在するとき、(A)はこれを「知っている」状態として措定する。ここには「ソクラテス」、「テアイテトス」といった見知りのなものから、「テアイテトスは醜い」といった命題的なものまで含まれる。そして、このようなものが存在していないときには、「知らない」といわれるのである。このようなかたちでのさまざまな知について、「知っている」か「知っていないか」の二分法の適用は、確かにありそうなものになるといえるだろう。<sup>(9)</sup>

以上のように、判断者の中にすでに存在している知と、それをもとにして成立する「思い」という、「思いなし」の構造がまず確認される。ここから、ソクラテスは四つの場合分けを行ない、それぞれの場合において虚偽の可能性を否定していく。まず彼は、判断が「知っているもの」のみによって構成される場合を考察する。

ソクラテスは以下のように議論する。「知っているもの」については、虚偽を思いなす筈はない。というのは、知っているからには、それを、別のものと考えることはないからであり、もしそのような事態が生じたとしたら、それは「同一のものを知っていて、かつ知らない」状態なのであり、そのような事態は成立しえないのだからと。すでに見たように、これを二つの対象についての虚偽の同一性判断(「aはbである」)として理解する必要はない。むしろソ

クラテスが述べていることは、「判断者が何かを知っていたら、知っている通りにそうであると思ひなすに違ひないものであり、その知に逆らつた判断をあえておこなうことはしない」という意味に理解可能である。つまり、「知っているもの」が思ひなしの中に登場するときとは、単に「aだ」という思ひなしが成立しているときなのであり、このとき判断者は、それとは異なつた「bだ」という思ひなしに至ることは決してないことなのである。たとえ、テアイテトスについて、彼が醜いということを知っていれば、判断者は「テアイテトスは醜い」という思ひなしを持つのであり、その知に逆らつた「テアイテトスは美しい」という思ひなしをもつことは決してないのである。もちろん、ここで判断者があらかじめ持つてゐる知の身分が当然問題になりうる。というのは、このような「知」によつて、判断者にとって無矛盾な思ひなしが成立したとしても、それが必ずしも真なるものであるとはいえないだろうからである。しかるに、この議論においては、この点が全く考慮に入れられず、自動的にそれが「真なる」思ひなしと見なされてしまうのだと考へられる。

では、「知らないもの」についてはどうだろうか。ここでは、「知らないもの」についての思ひなしはそもそもありえないという理由によつて、虚偽の可能性は簡単に拒絶されてしまつてゐる。これは、判断者の中に、知識としてのいかなる情報も存在していないような状態として理解することができる。(A)において二分がおこなわれたとき、それは判断者の中に「知」があるかないかという視点から見られていた。判断者の中に、それに相当するような何らかの状態が成立すれば、それはすなわち「知識」が存在するのであり、成立していなければ「知識」は存在していないのである。このような観点から考へるとき、「知らない」とは判断者の中にそのような情報が存在していない状態と考へることができる。そして、このように考へるならば、「思ひなし」の中に「知らないもの」が入つてくるとき、



ソクラテスの取り扱いが全く冷淡である理由も理解できるのではないだろうか。

ところで、我々が虚偽の思いなしを抱えている判断者を観察して、その状態を記述しようとするとき、その記述はこのようなものにはならないことは明らかであろう。我々は、彼が実際には真実を「知っていないのに知っている」と思っている」と記述することが可能である。このとき、我々は、彼が「知っている」と思っている事柄を、(実は)「知っていない」事柄として記述している。すなわち、このような記述のもとでは、知と不知の二分という前提そのものが機能していないのである。このような視点から「思いなし」を見ると、ソクラテスの提示するディレンマの枠組みそのものが破れてしまうことになるであろう。

したがって、ソクラテスの提示している「思いなし」の記述は、むしろ、「思いなし」を判断者の側から見たときの記述であるように思われる。<sup>(10)</sup> 自分の思いなしに内的な確信の感情を抱いている判断者にとって、みずからの思いは真なる思いとして立ち現れる。というのは、彼はみずからの内部の知に対して従順に判断をなしたのであり、あくまで、知っているものを当の知っているものだと思っているからである。したがって、彼は、自分の判断が誤っているすなわち「知っていない」などとは、よもや考えないであろう。そして、このような、「思い」を知識に関連付けて理解しようとする立場にとって、この虚偽不可能論の論理は説得的なものになるように思われる。というのは、このような立場では、「思い」という確信を持つことが、「知識」を持つということと同義なのであり、その意味で「思い」の成立構造と「知識」の成立構造とは何ら差異化されていないのだと理解することができるからである。思っていない人間にとって「不透明な要素」は存在しない。彼はみずからの「知っている」ものをもとに判断を下すのであり、また、その知に逆らうような真似はしないからである。つまり、「思いなし」の成立構造を判断者の側になっ

て見ていくとき、彼が「別のもの」を思いなすということが不可能事として立ち現われてしまうのである。そして、テアイテトスはこのような内的確信に到った状態を「真なる思いなし」として理解し、それを「知識」と同一視しているのではないだろうか。そして、もしそうだとしたら、彼はいわば「思いの論理」といったものにとらわれていることになるのではないだろうか。そして、このような立場にたつて「真なる思いなし」を理解するとき、テアイテトス自身のおこなっている「真なる思いなし」と「偽なる思いなし」との差別化にも関わらず、「思いなし」は全て真であるというアポリアが登場して来てしまうのだと考えられる。

## 五

テアイテトスが以上のような論理にとらわれているということを示す証拠が他にもいくつか存在する。これらのうち、もつとも決定的だと思われるのは、「思い違い」モデルによる解決の試みが再びアポリアにおちいる箇所である。「思い違い」についてのソクラテスの説明が、単に二つの対象の間の同一性判断を問題にしているのではなく、ソピステス篇で提示されているような解決の方向を示しており、虚偽の説明として成立しえていると理解しうることはすでに見た(二章)。しかし、実際にはこの解決は、これに対するテアイテトスの賛意の表明(189b-7)をきっかけとして再びアポリアに陥ってしまう。問題は、この前後でいかなる変化が起こったかということである。

ファインが正しく指摘しているように、このテアイテトスの言葉以前の「思い違い」の定式化と、それ以後の定式化では明らかな差異が存在する。<sup>(11)</sup> すでに見たように、最初の定式化は不透明性を許容するものであるのに、後の説明

ではそれを許容しないのである。すなわち、ソクラテスの説明においては、成立する思いなしは「テアイテトスは美しい」というというものであり、判断者はテアイテトスについて「美しい」と「醜い」を取り違えているという解釈が可能であったが、これに対し、それ以後の説明においては、思いなしは「醜いものが美しい」といったものとして提示されているのである。つまり、前者の説明においては、テアイテトスが実は醜いということは判断者にとって隠れているのに対し、後者においてはその事実が判断者にそのまま立ち現れてしまっているのである。

では、このような違いをもたらしたものは一体何だったのだろうか。この点で注目すべきはソクラテスによって、「ところが自分自身とおこなう対話」として提示される「思いなし」の説明である（189e4-190a7）。それによれば、思考とはところが自分自身に対しておこなう問答にほかならない。そしてこの問答の結果、こころの述べることが同一となつて分裂がなくなるとき、それが「思いなし」と呼ばれるのである。ここで記述されているのは「思いなし」にいたる過程であり、このソクラテスの説明は、判断者が確信の念にいたりつく姿を描写している。判断者の内部に分裂状態が存在する限り、すなわち自分の考えの矛盾をみずから意識している限り、彼が何らかの確信の念を抱くことはないであろう。しかし、みずからの内部にそのような分裂が感じられなくなったとき、彼はそれが正しい考えであるという確信を抱くようになる。ソクラテスがここで語っている判断者の「思いなし」とは、このような状態のことなのだと考えられる。<sup>(12)</sup>

テアイテトスはこのような確信の状態を「思いなし」として認める。190b2-8で述べられているように、判断者は、自分が「美しいもの」として把握している対象を、「醜い」と考える筈はない。すなわち、このレヴェルにおいて彼が矛盾的な判断を下すことは考えられない。したがって、このレヴェルだけから見ると、判断者にとっての不透明

性は、彼の「思いなし」の記述の中にはあらわれてこないのである。そしてこのような確信の状態こそ、テアイテトスにとって誤りのない「思いなし」すなわち「真なる思いなし」にはかならないのではないだろうか。<sup>(13)</sup>

もし以上のように理解することが許されるなら、実は第二部の議論は、まさしくテアイテトスの第二定義であるところの「真なる思いなし」を巡るものであったといえるように思われる。というのは、ここで虚偽の思いなしを不可能なものたらしめている「思いの論理」は、まさしく、テアイテトスにとって「真なる思いなし」がいかなるものであったのかを物語るものだからである。すなわち、テアイテトスにとっての「真なる思いなし」そのものが、実は虚偽の思いなしの可能性そのものを原理的に塞いでしまうものだったのである。

## 六

第二部において、テアイテトスはこのような論理に捉えられている。対話が第二部の終りで結局アポリアに終わってしまうのもこのためであると理解できるだろう。では、ソクラテスはどうかのだろうか。我々は、結局プラトンもこの論理を打破することができなかつたと考えるべきなのであろうか。<sup>(14)</sup>最後にこのことについて一瞥しておきたい。

「思い違い」によるソクラテスの虚偽の説明が必ずしもこの論理にとらわれているわけではないということはすでにみた。このソクラテスの説明は、これに対するテアイテトスの理解ゆえに再びアポリアにとらえられてしまう。そして、これ以後、最初のアポリアが再登場し、議論はこれを巡って進行することになる。この議論において我々が何よりも注目すべきなのは、「計算間違い」を巡っての議論である。この議論において「5+7」を「11」だと思いな

す者は、「12」を「11」と思いなす者として理解されている。しかし、これは誰が見ても誤った想定だといえる。このような者は、「12」の代わりに「11」を思いなしているとはいえるが、「12を11だと思ひなしている」とは決していえないのである。

このような、あからさまに不合理な考え方をソクラテスが提示している理由を、プラトン自身の無理解に帰することも可能であろう。<sup>(15)</sup>しかし、このような例の提示によって、プラトンが読者に問題の核心を示そうとしているのだと考えることもまた可能であろう。この例において、判断者のなかに「11だ」という思いしか存在していないのは明らかである。にも関わらず、ソクラテスの記述の仕方においては、「12」が彼の思いの記述の中にそのまま姿を現している。このような記述をおこなうことによって、プラトンはアポリアを導いた考え方が実はいかなるものであったのかを読者に示そうとしているのではないだろうか。

この点で興味深いのは、この「7 + 5 = 11」という計算間違いの例においては、「12であるものを11であると思う」ことの不可能性が問題になっていたのに対し、その直前の文脈（195e）においては、「11であるものを12であると思う」ことの不可能性が問題になっているという事実である。そこでテアイテトスは、ひとが思考のうちに「11である」と把握しているものを「12である」と思うことは不可能であると主張する。すなわち、「11だ」という把握を得てしまった以上、判断者の中に分裂がないかぎり、彼はそれが「12だ」という判断はしないのであり、その限りで矛盾のない思いなしを持つているといえる。ソクラテスはこのテアイテトスの主張に対して「7 + 5 = 11」という虚偽の例を持ち出す。そして、これ以後は、「12であるものを11であると思う」ことの不可能性が問題になるのである。この11と12の逆転がプラトンの単なる筆の滑りだとは考えられない。<sup>(16)</sup>むしろ、この二つの「思いなし」は、実は同一

の事態を別様に記述したものでないかと考えられる。

我々は、プラトンがこの言い換えによって、問題の核心を提示しようとしているのだと理解することができるのではないだろうか。というのは、テアイテトスの考えにおいては、この中で「11だ」という把握をしてみた者が、それに逆らった「12」だという思いなしを持つわけではないというところで「思いなし」が問題になっていたのに対し、ソクラテスの提示においては、そこに「12」がそのまま、むきだしのかたちで登場してくるからである。「思いなし」が真であるか偽であるかを問題にするためには、まさしくこの点を「思いなし」の記述の中に持ち込まなくてはならないのである。つまり、この「7+5=11」という偽なる思いなしを（実は）12であるものを、11であると思いなす」と言い替えることによってプラトンは、テアイテトス的な「思いなし」の記述に決定的に欠けているのが、「12」という（判断者には見えていない）正しい答えという視点であり、ここに不透明性が現れているということを示唆しようとしているのだと考えられる。従って、問題は「12であるものを11であると思う」という記述をどのように理解するかという点にかかってくる。

この「12」を、ソクラテスは、判断者の中に内在している何らかの知として提示している（196b4-6）。このソクラテスの教唆がテアイテトスを再びアポリアの中に引き込んでしまったことは明らかであろう。だが、「5+7」の答えとしての12と、判断者の中にあらかじめ存在している12が、その身分を異にしているということは、誰の目にも明らかではないだろうか。ソクラテスはこれを全く無視した議論をおこなうが、問題はテアイテトスがこれに簡単に同意してしまうという事実である（196b7）。そして、テアイテトスが再びアポリアに落ち込んでしまうのは、まさしくこの差異に気付かなかったことに由来するといえるのではないか。そして、彼がこれに気付きえなかつた理由は、

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

まさしく彼がかの論理に捉えられているからだとはいえないだろうか。

事実、この直後でソクラテスは、「知っている」という事柄そのものに対する反省の不十分さがアポリアの原因であったことを示唆している（196d6-e7）。そして、その後なされる最後の解決の試み（197a ff.）においてソクラテスがおこなおうとしているのは、この「知っている」ということに二義を設け、「思いなし」の成立のためには単に何らかの知を持っているということだけでなく、思考という働きによって、（正しい答えとして）それを再把握する段階が必要とされるといふことを示唆することなのである。すなわち、そこでソクラテスは、テアイテトスのな理解では全く考慮に入れられていなかったこの再把握の段階を「思いなし」の記述の中に引き入れ、この把握の失敗の中に虚偽の記述の可能性を見いだそうとしているのだと考えられる<sup>(17)</sup>。だが、この重要な示唆も再度アポリアにとらえられてしまう。しかし、この原因がテアイテトスがみずからの発想を乗り越えられなかったところに存していることは明らかであるように思われる<sup>(18)</sup>。

注

- (1) これが第一のアポリアと全く同一のものであるとさええるか  
については問題があるが、少なくとも強い関連を持つてゐる  
とすることは確かだと思われる。なお、両者の相違については  
cf. D. Bostock, *Plato's Theaetetus*, Oxford (1988), p. 176.
- (2) 代表的な解釈として、W. G. Runciman, *Plato's Later Epis-  
temology*, Cambridge (1962), R. S. Bluck, "Knowledge by Ac-  
quaintance" in *Plato's Theaetetus*, *Mind* n. s. 72 (1963),  
259-63, G. E. L. Owen, "Plato on Not-Being", *Plato I* (G.  
Vlastos ed.), New York (1971), 223-267, J. McDowell, *Plato  
Theaetetus*, Oxford (1973), N. P. White, *Plato on Knowledge  
and Reality*, Indianapolis (1976) などがある。
- (3) McDowell, *op. cit.*, pp. 194-198.
- (4) このような解釈が可能であると考ええる論者として、C. J.

F. Williams, 'Referential Opacity and False Belief in the *Theaetetus*', *Philosophical Quarterly* 22 (1972), 289-302. G. Fine, 'False Belief in the *Theaetetus*', *Phronesis* 24 (1979), 70-80, pp. 72-76, Bostock, *op. cit.* pp. 169-176, 1)6-7.

(5) 以上のように解釈するとき、ソクラテスの「思い違ひ」モデルの説明は、ソピステス篇における虚偽の問題の解決の方向性と基本的に同じ方向を向いているといえる。この点については Fine, *op. cit.* の考え方に賛成したい。

(6) Fine, *op. cit.*, p. 72.

(7) Fine, *op. cit.*, p. 77.

(8) 187c7, d78 のソクラテスの言葉が第一部で問題にされているプロタゴラス説へのほめかしであることは明らかであると思われ。cf. Campbell, *The Theaetetus of Plato*, Oxford (1861), p. 147, McDowell, *op. cit.*, note on 187c-e.

(9) 学ぶ、忘れるを中間状態とするソクラテスの言葉 (188a1-4) は、このことを如実に物語っているのではないだろうか。すなわち、我々が記憶の中に何らかの情報を蓄えたとき、それが「知っている」状態といわれるのであり、また、このような情報が失われ、欠如しているとき、それが「知らない」状態といわれるのである。

(10) これと同様の視点は、すでに今井知正、「偽と不知(一)」『人文科学紀要』第93輯(哲学XXV)、東京大学教養學

部人文科学科 哲学研究室篇(1989, pp. 139-169)において提示されているが、第一のアポリアそのものの読み、およびなぜこのようなアポリアが提示されたのかについての私の解釈は異なっている。

(11) Fine, *op. cit.*, pp. 75-76.

(12) 我々はこの説明を、プラトンのな理論的考察の説明として限定する必要はない。というのは、ここで強調されているのは、こころが何らかの確信を持ったとき「思いなし」が成立するということであり、必ずしも長い分裂状態を要求するようなものではないからである。

(13) これと同様の議論は、199dEにも明確に現われている。「知識」と「無知識」という概念を導入することによってアポリアから抜け出そうとするテアイテトスに対して、ソクラテスは「思いの論理」を展開し、これを認めることによってテアイテトスは再びアポリアに陥ってしまう。すなわちそれによれば、虚偽の思いなしを持つ者は、自分の思いなしが真実だと考えている、すなわち、自分が把握しているものは虚偽であるのに、それを知っているような気になっているのである。したがって彼は、自分がかんんでいるものを知識であると思うが、しかし、虚偽であるとは思わないのである。

(14) プラトンがこれに気づいていなかったとは考えられない。たとえば、第一部におけるプロタゴラス説批判において、ソ



プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

クラテスは、判断者をそれ以外の人間が観察した場合を考えてみる。(170c)

(15) 例えは Williams, *op. cit.* は、このような分析が生じる根底には、指示の透明・不透明の区別についてのプラトンの無理解が存していると考えている。

(16) 実際、この議論が終るところで (199b3-4)、ソクラテスは再び「11を12だと思ふ」という表現を用いている。

(17) このことは、実は「思い違い」の説明において明確に示唆されていたことであった。cf. 189c1-2 'antallaxamēnos tē(i) di-anoiā(i)', c3 'hamartanōn hou eskopei'

(18) このことは、これまでの対話が完全にアポリアに終わってなお、テアイテトスが第二定義に固執しているという事実 (200e4-6) に明確に現われているように思われる。